

今、私たちの生きる道

文◎東孝信

日蓮聖人の御心

ものにひかれる人もいます。

節分になると柊（ひいらぎ）の枝にイワシの頭を刺し、門口に立てて魔除けにする風習があります。「イワシの頭も信心から」とは、これを見た人が、イワシの頭さえも信じればお祀りされる対象となることを、椰揄（やゆ）した言葉です。昨今では、競馬の予想や宝くじが当たり、一獲千金をねらえるという、不思議な財布やブレスレットが売られていますね。これを買いたい求める人は、「財布やブレスレットも信心から」ということになるのでしよう。

さて現在では、既成宗教・新宗教・新々宗教といった数多くの宗教団体があり、その信者数の合計は、日本の国民の人口を上回るそうです。また宗教団体に属さないでも、占いや神秘的な

一方これらの人々とは別に、科学万能主義・拝金主義等、自身が決めたことを信じる人々も多く、おおむね彼らは無宗教をかかげ「信仰はしていない」と主張されます。しかしこの場合も、言いかえれば無宗教・無信仰という宗教を信仰をしていることになり、そのことに気がついていないだけなのです。

こうしてみると、日本中には多種多様な信心が蔓延（まんえん）しており、極端な言い方をすれば、人の数だけ信仰の形があるのではないでしようか。

しかしこれらの中には、自らの我心を満足させるだけの信仰も多く、自己満足による「目の前の不安からの逃避（とうひ）」が少なくありません。

日蓮聖人のご出家の動機は「世間を救わんがため」で、これはご生涯を通じたテーマでもあります。このテーマに基づき、仏教を始めとした当時に伝わる思想も研鑽されました。そして得られた結論が、お題目に結ばれた法華経の信仰だったのです。この結論を知ったにもかかわらず、伝えなければ「慈悲（じひ）なきに似たり」と思われた日蓮聖人は、ここで本仏であるお釈迦さまの大いなる慈悲心をもって、法華経を広めるご決意をされました。

日蓮聖人の始唱（ししよう）されたお題目は、本仏のお悟りの世界であり、大慈悲心でもあります。つまりお題目をお唱えするということは、自分だけの幸福を願うものではなく、世界全体、いや宇宙全体の幸福を願う祈りであり行動なのです。

日蓮聖人はお題目を広められるに当たり、世間一切の苦を自らの苦と受け止められました。実はこの世間こそが

すべて仏さまの世界であり、それを忘れた人々が、各々の仏を呼び覚ます「南無妙法蓮華経」というお題目を唱えることで、仏に目覚めた生き方ができるよう導かれたのです。そしてこの娑婆世界が、お題目によって安心立命の「立正安国」世界となるよう願われました。だからこそ、法華経以外の教えでは苦から解放されることはなく、安心な世界も実現できないと力説され、他の教えを破折（はしゃく）されたのです。

日蓮聖人の行動は、人によつては排他主義のようにとられるかもしれませんが。しかし、相手を本当に救いたいとの思いが、法華経以外の教えを信じる相手を破折させるのです。それは決して相手の存在を否定するものではなく、仏さまの世界にいる相手を真に認め、苦から解放されるようにと願う慈悲心から起こる行動でした。

こうした行動によつて、悪口やのしりはもとより「大難四ヶ度小難数知れず」と言われるほどの法難にあわれ

ます。しかし日蓮聖人は、この経を広める者は難を受けるといふ法華経の金言をもつて「難来たるをもつて安楽行（あんらくぎょう）となす」と受け容（い）れられるのです。そうして難を加える人々を、自らの修行を助けてくれる「善智識（ぜんちしき）」として仏の世界に包みこまれ、お題目の広宣流布に生涯を捧げられました。

一方で、これらの難をお受けになられることは、ご自身が末法の世の中を救い、仏の国土を実現させるための大導師（だいどうし）として、本仏より全権を委嘱（いしよく）され派遣された上行菩薩（じょうぎょうぼさつ）の再誕であるという証明にもなりました。日蓮聖人がこの世の中に出現された意義が、法難によつて明確となったのです。これは自らの特性や能力を開花させるといふ、狭い意味の「自己実現」ではなく、上行菩薩の再誕という、まさに時間と空間を超越した本来の自己を、本来の役割をもつて実現されたと言えます。

お題目の唱え方

では、日蓮聖人の始唱されたお題目を、私たちはどのようにお唱えすればよいのでしょうか。

「法華経を余人（よにん）のよみ候は、口ばかりことば（言）ばかりはよめども心はよまず。心はよめども身によまず。色心二法（しきしんにほう）共にあそばされたるこそ貴く候へ」

本仏（ほんぶつ）であるお釈迦さまの御心が分からない人は、口で法華経を読んでいたとしても、心では読んでいない。また心で読んでいたとしても、身では読んでいない。口・心（意）・身の三業（さんごう）にわたつて法華経を読むことが尊いのである。お題目をお唱えすることこそ全身で法華経を読むことになる。日蓮聖人は説かれています。

口は自身と一切のもののお仏を呼び覚まし、心では感性豊かに、柔軟にして仏の大慈悲心を発動し、身は法華経を信じるがために誹謗中傷（ひぼうちゆ

うしよう)や迫害を堪(た)え忍ぶ、柔和忍辱(にゆうわにんにく)の姿勢で生きることです。

また「其(そ)れに付いても法華經の行者は信心に退転無く身に詐親(さしん)無く、一切法華經に其の身を任せて金言(きんげん)の如く修行せば」と、法華經に自分自身のすべてを任せることが、お題目の「南無」の意味となります。

さて言うまでもなくお題目は、口で「南無妙法蓮華經」と唱えることから始まります。しかし「唱える」という言葉にこだわりをもたれるせいか、口でさえお唱えしていれば充分だと思われていて方が多いように感じます。

お題目を口唱(くしょう)することは、本仏が一切世間を救済されようとする大慈悲心と、そのお悟りの世界を譲り受けようとすることであり、自身の仏に目覚めることでもあります。お題目を口唱する心地よさにひたり込み、自分だけが安心を得る世界で、お題目が求める「一切世間の安心」を忘

れてしまつてはなりません。車輪の片輪のみの回転をさせても、同じ所を回るだけで前には進まないように、仏さまの慈悲と悟りを自分だけが戴こうという利己的な信仰では、本仏と日蓮聖人の御教えに反し、本来のお題目の意味が生まれてこないのです。

成仏するということは、悟りを得ると同時に、悩める衆生を救済する慈悲心を持つことであり、それこそが心(意)で唱えるお題目です。ここに、いかなる困難が生じようとも仏の慈悲を働かせようという、誓願が生まれま

す。これは、本仏であるお釈迦さまの弟子としてお題目を広め、一人でも多くの人がお題目の信仰を持ち、娑婆と見えるこの世界が本当は仏さまの国土であることを実現しようとする、誓いと願いなのです。

さらには、この誓願を持つてお題目を他人に説くところに、身で唱えるお題目があります。お題目を広めると言つても、人は簡単にお題目の信仰を受け入れてはくれません。自分では有

り難いと信じていても、他人にその有り難さはなかなか伝わらないものです。またお題目の信仰をしているつもりでも、日蓮聖人が伝えようとされた信仰ではない方もおられます。このように、人々にお題目の尊さを伝えるには、大変な困難がつきまとうものです。

現在の日本には言論の自由がありませんから、多少言いたいことを言つてもあまり問題にはならないでしょう。それでも自分の信じている宗教を否定されたり、自分の生き方が間違つていたりと言われると、あまり気分の良いものではないかもしれません。ですからそれが、悪口やのしり等となつて返つくる場合があります。

しかし、それがあから説くことをあきらめては、誓願の意味がなくなつてしまいます。相手を本当に救済したいと考え、どのような困難が生じようともお題目を伝えなければ、真に平和で安心な世界にはならないからです。

信じる人、誇る人

ただし、ここで注意をしなければならぬことがあります。「自分は人々を救う大切なことをしているのだから」という思いがうぬぼれとなり、相手の人格まで否定してしまうことです。

法華経は、決して人格までを否定しません。例えば自身の安心だけを求めて修業し、輪回（りんね）の世界からも離れてしまったために成仏を許されなかつた声聞（しょうもん）・縁覚（えんがく）と呼ばれる人々にも、法華経においてはすべて成仏の授記（じゅき＝保証）が与えられています。自身のための修行さえも、実は仏の慈悲をもって行動する菩薩行（ぼさつぎょう）であり、衆生を救済にすることになると、お釈迦さまは説き明かされたのです。

私たちがお題目を広めようとする時、相手の行動には必ず意味があることを認識しなければ、自分に不都合な

人を切り捨ててしまいかねません。誰に対しても慈悲をもって接するつもりが、無慈悲な者になってしまうのです。

皆さんが法華経を読む前にお唱えする開経偈（かいききょうげ）には「若（も）しは信、若しは誇（ほう）、共に仏道を成ず」と有ります。お題目を素直に受け容れる「信」の人はもちろんのこと、逆に誇（そし）つたり罵（ののし）つたりする「誇」の人でさえ、その罪によつて一度は地獄に堕ちますが、成仏することができます。なぜならののしること法華経と縁を持ち、来世はお題目の世界で修行することができからです。

以上のことを説く人が十分に理解していなければ、教えを受け入れてくれない人を「物分りの悪い人」「自分の善意が通じない人」としてしか見ることができません。それでは口先だけのお題目になり、慈悲の心を失い、柔和で忍耐強い姿勢を失ってしまいます。そうなるとお題目を身（しん）・口

（く）・意（い）の三業で読むことができず、信仰しているはずの自分が「誇」の人となつてしまい、法華経の世界に入れなくなるのです。

説くことは説かれること

これまででは、お題目を広めるにあつて用心すべきことをとりあげました。次は、自身の心の動きについて考えてみたいと思います。

法華経には仏・菩薩・縁覚・声聞・天・人・修羅（しゆら）・畜生（ちくしょう）・餓鬼（がき）・地獄という「十界」が、お互いに十界（じゅつかい）を具えていると説かれています。そして私たちの心にも、地獄は瞋（いか）り、餓鬼は貪（むさぼ）り、畜生は愚痴（ぐち）、修羅は詭曲（てんごく）＝うぬぼれ・嫉妬）、人は平ら（揺れる心）、天は喜び、声聞・縁覚は世の無常を感じる心、菩薩は慈悲、といった状態でこれらが現れます。その各々が他の九界を具えていることから、仏を具えていることを信じなさい

悪世に生れて広く此（こ）の経を演ぶるなり。若しの善男子・善女人、我が滅度の後、能く窃（ひそ）かに一人の為にも法華経の乃至（ないし）一句を説かん。当（まさ）に知るべし、是の人は則ち如来の使（つかい）なり」

私たちは、衆生を救済する法を説くためこの世に生れてきました。法を説くのは、なにも僧侶だけではありません。本当はすべての人が互いにお題目を説き合っていて、日常生活のあらゆる場面で互いに教え、教えられているのです。

お題目をお唱えする人は、そのことを充分に知ることのできる縁を持ち、活用できる立場にあります。これは自らが、すべての成仏を祈る本仏の直弟子「地涌（じゅ）の菩薩」であるという自覚を持つことができます、時間と空間を越えた深いご縁なのです。

私たちがそれぞれの生活の場において、共にお題目の廣大無辺な働きをその身に現じ、日蓮聖人の誓願の世界「立正安国（りっしょうあんこく）」

を実現するため精進することが、立教開宗（りっしょうかいしゅう）七五〇年を慶讃する意義と言えます。ご正當となる平成十四年四月二十八日をお迎えするに当り、このことを再認識して共に行動してまいりましょう。

【今、私たちの生きる道◎完】

1999.04/28

written by Koshin Azuma

produced by NOMA

<http://www.sunlotus.org/>